

第4章 『仏本行集経』と龍門古陽洞の歩歩生蓮図

第1節 古陽洞の題字と図柄

隋代の龍門石窟をみると、造像活動を跡づける紀年銘は、開皇15年（595）の賓陽洞外北側にある裴（はい）慈明の裴龕銘記と、大業12年（616）の賓陽中洞外北側にある李子贇（いん）の観音像龕、そして同年の賓陽南洞内にある梁佩仁の釈迦二菩薩造像銘記のわずか3点である¹。

そのため、この時代の龍門はあまり造窟されなかったと理解されている。しかし、他の石窟、たとえば敦煌莫高窟では、全492窟のうち100窟が、隋代の修造・重修窟である²。隋代が37年間という短期間であることからみて、この造仏事業は決して少ない数ではない。

また『隋書』『弁証論』等の記載からみると、初代文帝楊堅と二代煬帝楊広の崇仏政策は、異常なほど巨大である。大略次のように記している。

「開皇元年（581）、高祖普く天下に詔して、出家を任聴し、仍りて計口出錢せしめ、経像を营造す……」（『隋書』卷35）³

「開皇3年（583）詔して曰く、朕聖教を欽崇し、神宇に念存す。それ周朝に廢せし寺ごとごとく修復すべし。……開皇の始めより仁寿の末に終るまで、度せし僧尼二十三万人、海内の諸寺三千七百九十二所、凡そ経論を写せし四十六藏、一十三万二千八十六卷、修治せし故経三千八百五十三部、金銅・檀香・夾紵・牙石の像等を造りし大小一十万六千五百八十軀、修治せし故像一百五十万八千九百四十許軀、……。隋煬帝嗣ぐ。……修治せし故像一十万一千軀、鑄刻せし新像三千八百五十軀、度せし僧尼一万六千二百人……」（『弁証論』）⁴

文献ではこのほかに『法苑珠林』卷100に記述がある⁵。もしこれらの記載が、龍門石窟が何らかの関係をもつとすれば、それは、この文中の、文帝楊堅の修治した古（故）像が150万余軀、煬帝の場合が10万余軀とある記述に関連する、主に古像の修治の問題であろう

¹ 李文生「龍門石窟関係年表」（『龍門石窟』2,平凡社・文物出版社,1988）。

² 敦煌文物研究所「敦煌莫高窟内容総録」（『敦煌莫高窟』5,平凡社・文物出版社,1982）。

³ 唐・魏徵『隋書』35（北京・中華書局,1973,p.1099）,「開皇元年,高祖普詔天下,任聴出家,仍令計口出錢,营造経像,……」の文。

⁴ 唐・法淋『弁証論』3（『大正蔵』52,1927,p.508c-509b-c）,「開皇三年詔曰,朕欽崇聖教,念存神宇,其周朝所廢之寺咸可修復。…（中略）…自開皇之初終於仁寿之末,所度僧尼二十三万人,海内諸寺三千七百九十二所,凡写経論四十六藏,一十三万二千八十六卷,修治故経三千八百五十三部,造金銅檀香夾紵牙石像等,大小一十万六千五百八十軀,修治故像一百五十万八千九百四十許軀,……」,「隋煬帝嗣。…（中略）…修治故像一十万一千軀,鑄刻新像三千八百五十軀,所度僧尼一万六千二百人」の文。

⁵ 唐道世撰『法苑珠林』卷100（『大正新修大蔵経』53同刊行会,1932,p.1026b）。

と思われる。したがって、ここでは、はたして龍門には、それを実証するものがあるか否か、他の石窟とのバランスからみて、どのようになるかを検討してみることにしよう。

ともかく、龍門石窟では古陽洞が最も古い。最古の造像記事は太和17年（493）、新城県功曹孫秋生等二百人による造龕で、その後30年近くにわたり、洞内に北魏時代の銘文を数多く残している（図2-45）。書道で龍門二十品とよばれる造像記は、その代表を集めたものである⁶。

この古陽洞は、洞内右壁奥に「古陽洞」の題字が刻まれていることによるが、『魏書』の熙平2年（517）靈太后が伊闕の石窟寺へ行幸したとある記事から、当時は石窟寺とよばれていたことが知られる⁷。

古陽洞の意を“古の洛陽の石窟洞”の略称とすると、おそらく開鑿時の呼び名ではなく、その後の時代に名付けられたとみるのが自然である。いずれにしても、いつ名付けられたか明らかではない。

題字の書風をみると、北魏初期の硬い楷書とは違って、隋唐風の軟らかい楷書である（図2-46）。たとえば、上記孫秋生等の造像記や牛厥造像記と、洛陽出土の安善夫妻墓誌（709年、図2-47）や隋智永の千字文などを比較すれば、その違いは一目瞭然である。

つぎに、題字の背景をみると、中央に水瓶から立ち上がる蓮華があり、左右からこれに向かう供養者の群像が4段に分かれて立っている。最上段に従者を連れた皇帝（右）皇后（左）、中の2段は持華供養の従者達、下段は供物を捧げた多数の従者が描かれている。

描かれた蓮華の模様でみると、題字の古字右上の蓮華は、題字右隣の北壁3層第1龕の龕眉に描かれる蓮華とほとんど同じである。また、この龕内左上の三葉の蓮華を持つ天人は、題字の従者と同類である（図2-48,2-49）。であれば、題字の作成と右隣の仏龕浮彫は、同一時期の可能性をもっていると考えることができる。

題字の背景のテーマ、皇帝礼仏図では、ここ龍門の賓陽洞と、鞏県石窟第4龕にあり、前者は『魏書積老志』にいう、宣武帝が高祖文昭皇太后の追福のために営んだ靈巖寺、すなわち賓陽洞であり、景明元年（500）に始められ、正光4年（523）に成ったものである（図2-50）⁸。後者は、時期不詳であるが、この賓陽洞に範を取り作られたとされているので、6世紀中葉以降であろう。

中央の蓮華をテーマとする作例を敦煌で見ると、たとえば280窟、292窟、305窟、417窟などで、北魏よりもむしろ隋代に作例が多い（図2-51）⁹。

⁶ 水野清一、長広敏雄『龍門石窟の研究』（1941、同朋社1970）。

⁷ 北齊・魏收『魏書』9、肅宗紀（北京・中華書局、1974、p.225）、「夏四月…乙卯、皇太后幸伊闕石窟寺、即日還宮」の文による。

⁸ 同上『魏書』114、積老志（同上p.3043）、「景明初、世宗詔大長秋卿白整準代京靈巖寺石窟、於洛南伊闕山、為高祖、文昭皇太后宮石窟二所…」の文による。

⁹ 『敦煌莫高窟』1-5、平凡社・文物出版社、1980-84。以下、敦煌関係はすべてこれによる。蓮華をテーマとする図6は、大村著（下掲注15）680図で、隋開皇9年の作例である。

一般的な蓮華を手に持つ持華供養者の場合でも、隋代に及ぶ作例の多いことが知られる。敦煌の62窟、281窟、295窟、303窟、304窟、390窟、394窟、427窟などは、いずれも隋代の持華供養者像を描いている（図2-52）。

したがって、古陽洞の題字とその背景の図柄は、いずれも隋代にまで及ぶとみることが可能である。

ここで題字の背景からは離れるが、古陽洞内の各龕の龕楣等でみられる図柄について確認してみよう。一つは龕楣を龍頭で飾る図（図2-53）や、豪華な華綱を天人が吊り下げる図（図2-54）、あるいは連珠文で縁を飾る図（図2-53）など、いずれも隋代に及ぶ作例を見出すことができる。たとえば、龕楣に龍頭をつける例は、敦煌で303窟、304窟、419窟、423窟、427窟にみられ、華綱を天人が吊り下げる例は、洛陽の水泉石窟（図2-58）にあり、連珠文の例は、敦煌の277窟、282窟、380窟、390窟、397窟、401窟、404窟、420窟などにある。

もう一つは、維摩と文殊の対問を示す図（図2-55）で、敦煌では276窟、314窟、380窟、420窟などの隋窟で見出すことができるので、これも隋代に及ぶことが知られる。したがって、古陽洞内の他の仏龕浮彫も、本来は造像銘記で示される北魏時代の開窟であるとしても、古陽洞の題字とその背景と同様、その修造・重修時期が、隋代にまで及ぶと見なければならぬ。

第2節 『仏本行集経』と歩歩生蓮図

古陽洞南壁の列龕第2層に、釈迦多宝二仏並坐の仏龕がある。この龕楣に釈迦仏伝図が描かれている。太子の誕生から成道までを、左右から中央に向けて、左に乘象入胎、游园、樹下誕生、歩歩生蓮、九龍灌頂を描き、右に報喜、阿私陀占相、立為太子、山林之思、遣散仆馬、苦修成道を描いている¹⁰。いまここでは、歩歩生蓮図（図2-56）について考察してみよう。

仏伝故事を記す漢訳仏典は、① 後漢・竺大力・康孟詳訳『修行本起経上』、② 劉宋・求那跋陀訳『過去現在因果経』③ 隋・闍那崛多訳『仏本行集経』④ 唐・地婆訶羅訳『方广大莊嚴経』等がある¹¹。ところがこの中で、歩歩生蓮は、① ②に記されず、③ ④に記されている。③の『仏本行集経』（巻8）ではつぎのようにある¹²。

菩薩生まれおわり、人扶持することなく、即四方へ行き、面して各七歩、歩歩足を挙

¹⁰ 龍門文物保管所『龍門石窟』（北京・文物出版社、1980）図34ならびに解説。

¹¹ 後漢・竺大力共康孟詳訳『修行本起経』上（『大正蔵』3,1924p.463）、劉宋・求那跋陀訳『過去現在因果経』1（『大正蔵』3,p.625）、隋・闍那崛多訳『仏本行集経』8（『大正蔵』3,1924,p.687,689）、唐・地婆訶羅訳『方广大莊嚴経』2（『大正蔵』3,1924,p.553）。

¹² 同上『仏本行集経』8（『大正蔵』3,p.687b樹下誕生品, p.689a從園還城品）「菩薩生已、無人扶持、即行四方、面各七歩、歩歩举足、出大蓮華。…（中略）…我当作仏、即立於地無人扶持、即行七歩、足所履处、皆生蓮華」の文。

げれば、大蓮華を出す。……我まさに成仏すべし、即ち地に立ち人扶持するなし、即七歩
を行き、足の履むところ、みな蓮華を生ず。

とすると、これは、蓮華に象徴的な意義をこめた段階で、歩歩生蓮が付加されたと考える
ことができるのではないと思われる。

この、蓮華に象徴的な意義を強めたと思われる最もポピュラーな経典は、蓮華を題目とし
て掲げる『法華経』が、やはり第一であろう。たとえばつぎのようにある¹³。

若し人、散乱の心に、ないし一華をもって、画像に供養せし、漸く無数の仏を見たてま
つりき（方便品第二）

十小劫を満てて仏を供養す、ないし滅度まで つねにこの華を雨しき。（化城喻品第七）

この時に諸仏、各宝樹の下にましまして、獅子座に坐し、皆侍者を遣わして、釈迦牟尼
仏を問訊したまう、おのおの宝華をもち、もろてに満てて、之に告げて言わく、……（見
宝塔品第十一）

法を恭敬するが故に、諸々の妙華を持って空中に住立して、行持法の者を讃歎し恭敬せ
ん。（普賢経）

上記の『普賢経』は、『法華経』の結経として天台大師智顛により包摂されたものである。
彼は隋代で初代文帝楊堅、二代煬帝から篤く尊崇されていたことが知られる¹⁴。

さて、歩歩生蓮図を遺物から探ると、私見では、東魏武定4年（546）造の釈迦玉石像光
背に浮彫されたもの（図2-57）¹⁵と、北齊天保10年（559）の龍樹思惟像台座正面の作例を
早期のものとして見出すが¹⁶、これに遡る北魏の作例は、現在のところ見出すことができ
ない。

とすると“歩歩生蓮図”は、遺物の上で東魏、北齊を上限とし、経典の上で隋代を上限と
することから、仏伝故事として北魏に遡ることの難しい図像の一つであるということができ
るであろう。

第3節 洛陽水泉石窟と河南王寺

1990年に調査の公表された、洛陽市北郊の水泉石窟は、残存する摩崖碑文から、北魏太
和十□年（495まで）の開鑿であることが知られている¹⁷。この仏龕が、古陽洞に酷似して
いることに驚かされるが、北魏の石窟として、両者が時代を同じくすることからいえば、そ

¹³ 後秦・鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』（『大正蔵』9,1925,p.9a）、「若人散乱心、乃至以一華、供養於画像、
漸見無数仏」、（同9,p.22b）「満十小劫、供養於仏、乃至滅度、常雨此華」、（同9,p.33b）「是時諸仏、…
…皆遣侍者、問訊釈迦牟尼仏、各齎宝華滿掬、而告之言」、（劉宋・曇無密多訳『観普賢菩薩行法経』
同9, 1925,p.393b）、「恭敬法故、持諸妙華、住立空中、讃歎恭敬、行持法者」の文。

¹⁴ 「普賢観結成法華」と天台の『法華文句』（『大正蔵』34,p.128a）にある。

¹⁵ 大村西崖『支那美術史彫塑篇』付図（1915,国書刊行会,1972）図568。

¹⁶ 松原三郎『中国仏教彫刻史研究』（吉川弘文館,1966）図142上。

¹⁷ 温玉成「洛陽市偃師県水泉石窟調査」（『文物』文物出版社,1990-3）。

の類似性は当然であろう（図2-58）。

しかし、碑文には補刻部分がある。報告では、正文完成後ほどなくして補刻されたというが、はたしてそうであろうか。補刻部分は、洛州河南王寺～、と書き始められている。これを検討してみよう。

正史を調べると、河南王には、1 北魏河南王曜、2 北齊河南王孝瑜、3 隋河南王昭の3人を見出すことができる。

1 の北魏の河南王曜は、北魏道武帝の息子7人のうちの1人で、母が熙王夫人である。天興6年（403）で5才、泰常7年（422）に22才で薨じ、武芸絶人子供 7人がいたという¹⁸。

2 の北齊河南王孝瑜は、北齊第2代文襄帝の皇子 6人のうちの 1人で、母は宋氏である。天保元年（550）齊の受禪で河南王となり、中書令・司州牧を歴任し、第 5 代武成帝の河清2年（563）に 27 才で薨じている。文学も好んだが、政治的行きづまりから投水自殺をしたという¹⁹。

3 の隋河南王昭は、煬帝の皇子3人のうちの長子で、祖母は周の大司馬独孤信の7女、独孤皇后である。彼女は河南洛陽の人とある。開皇10年（590）12才で河南王となり同17年（597）納妃し、同21年（601）父楊広の皇太子昇任の翌年、晋王を押し内史令となる。そして大業元年（605）楊広の皇帝即位で皇太子となるが、翌大業2年（606）病のため28才で薨じている。強弓を能くし、謙虚で怒らず、仁慈の人材で、子供が3人いたという²⁰。

ところで、水泉石窟の摩崖残碑は、かなり磨耗していて読めない字も多いが、補刻部分に記されている造寺事業は盛大である。たとえば、造□千五百龍華像□区、造三千仏堂一区、造万仏三□六区、千仏天宮一区、造十六王子行像十六区、大仏像三万□□、などとあり、周辺各地で巨大な造像事業が営まれていたことが知られる²¹。もしこれが事実を伝えているとすれば、これはケタ外れの造仏事業と言わなくてはならない。

因みに、安陽の靈泉寺の隋開皇9年（589）銘の題記では、造窟に用功1624人、造像に900人を要し、盧舎那仏一龕、阿弥陀仏一龕、弥勒仏一龕、三十五仏三十五龕、七仏七龕、伝法法師二十四人を造立したとある²²。靈泉寺は齊・隋代に名僧とうたわれた靈裕法師の

¹⁸ 上掲注7『魏書』16,河南王曜伝(中華書局,p.389,395-9)。

¹⁹ 唐・李百薬撰『北齊書』11,河南康舒王孝瑜伝(中華書局,p.143-4)。

²⁰ 上掲注3『隋書』59,元徳太子昭伝(中華書局,p.1435-37)。

²¹ 補刻部分は次の通りである。「洛州河南王寺造銅像三区各□金□□并佛□□□造石□窟一区中置□□佛造□千五百龍華像□区□□□□山西北大狂水南□里造三千佛堂一区□当□□東北□里造一千五百龍華像一区□□□□東北三里造万佛三□六区延□堆上千佛天宮一区□□□狂水西□水南等三里□□佛天宮一区□小水北……佛一区□□□□□□里田□□中□□千五百龍華像□陸渾川長城西小水水北又一里造千佛天宮一区□□□□百□□像一区□柴造二千五百龍華像一区□造十六王子行像十六区□□五県内□大佛像三万□□一十六区千……」(『文物』文物出版社,1990-3,p.77)。

²² 楊宝順「河南安陽靈泉寺石窟及小南海石窟」(『文物』文物出版社,1988-4),丁明夷「北朝佛教

創始した寺で、皇帝からの援助も莫大であったとみてよいが、その造仏事業に比べても、水泉石窟は決して見劣りしない。

また、南響堂山で新たに発見された石窟の中に、隋代改刻の“滏山石窟之碑”がある²³。この碑からつぎの2点が明かになった。一つは、北斉天統元年（565）時の大丞相淮陰王高阿那肱により建立されたと記していること。これについては彼の伝が『北齊書』にあり、この年、後主の即位にともない、尚書左僕射から淮陰王に封じ、尚書令に除せられたとある。すなわち、碑文が、正史の記述を史実として裏づけているわけである²⁴。二つには、当山は開窟以来、靈像が一千軀に及んでいたが、北周武帝の廢仏で破棄された。しかし隋の建国で重修され、旧状に戻ったと記している²⁵。これは隋代の重修が確かに行われたことを明らかにしている。

また、山東省博興県の龍華寺が、発掘の結果、隋代の重建が明らかになっていることを知った²⁶。その後、隋代に追刻のある造像碑を見出した²⁷。それは表に北魏末永安3年（530）の銘文があり（図2-59）裏に西魏大統6年（540）の銘文が追加されている（図2-60）。そして表の末尾に隋仁寿2年（602）の追刻があり、追刻部分に、この碑を覆う仏殿を邑人の手で新たに建立したという。文様は、表裏類似しているが、裏面の方が複雑さを増している。これも隋代に重修したことを裏付ける証拠の1つとして加えることができるであろう。

さて、上記3名の河南王のうち、一体誰があてはまるのであろうか。1の北魏河南王曜の場合は、死去した年が422年であり、洛陽遷都（493年）をはるかに遡る点が問題である。洛陽遷都より前に、洛陽で巨大な造仏事業が行われたとは考えにくい。2の北齊河南王孝瑜の場合は、たとえば、東魏の武定4年（546）父文襄王が鄴都で、河南において反した司徒侯景の説得にあたり、翌々年（548）には、西魏の独孤信が洛陽を占拠している²⁸。したがって、北齊にとっての河南の地はきわめて不安定で、北齊河南王による洛陽での巨大な造像事業は、おそらくありえないであろう。とすると、3の隋河南王昭に焦点が絞られることになる。

隋河南王昭の場合は、祖母が独孤信の娘で、洛陽の人とあるので、この地で育った可能性がある。そして、祖父が文帝楊堅、父が煬帝で、本人がその長子、のち皇太子という皇位継承の最も恵まれた立場にあることを考慮すると、水泉石窟の補刻部分の巨大な造仏事業も、

史的な重要補正」(同)。

²³ 李裕群「南響堂石窟新發現窟檐遺迹及龕像」(『文物』文物出版社,1992-5) 図11,12。

²⁴ 前掲注19,高阿那肱伝(中華書局,p.690)。

²⁵ 前掲注23,図12,p.7。

²⁶ 「山東博興龍華寺遺址調査簡報」(『考古』科学出版社,1986-9)。

²⁷ 永安3年銘造像碑(大村西崖『支那美術史彫塑篇』1915,国書刊行会1972覆刻) p.242,289-290,296。

²⁸ 前掲注19,文襄帝紀(中華書局,p.32-36),唐・令狐德芬等撰『周書』16,独孤信伝(中華書局,1971, p.263-8)。

この人において十分あり得ることと思われる²⁹。であれば、この隋元徳太子昭の河南王時代、すなわち、開皇10年（590）から同21年（601）までの間が、洛州河南王寺の実質的な活動年代であるということになる。

以上の考察により、洛州河南王寺に対して、煬帝の子、元徳太子昭が、河南王に任じていた、開皇10年（590）から同21年（601）の間が、その建立・修造の可能性の高い時期として割り出された。とすると、逆にこの河南王寺の巨大な造仏事業を通して、開皇元年（581）にはじまる隋代の大がかりな修造・重修の存在が、一部裏付けられたともいえるのではないか。

つまり、龍門における隋代の重修も、文帝楊堅の故像修造を発令して後、煬帝の再発令が加わり、その子昭に継続しているとみるわけである。そして隋の滅亡は、昭の子、恭帝侑の薨去の年（618）なので、ここまで修造・重修が続いていた可能性がある³⁰。これが、当面考えられる最大幅である。

第4節 文様上からの考察

つぎに、龍門古陽洞における仏龕文様が、北魏時代の文様と比較して格段に複雑な様相を呈していることについて取り上げてみよう。これは文様研究に大きな業績を上げた、林良一氏の所論の挿図を比較することにより読み取ることのできる点である（図2-61,2-62）。すなわち、氏のいう輪つなぎ唐草文様において、縦横いずれにも単純な文様と複雑な文様の、明らかな差異（縦文図aとc，横文図aとf）が認められるという問題のことである³¹。

文様の出所がいずれも雲岡石窟ということで、氏はこれらをすべて北魏時代として扱っているが、はたしてそれでよいのであろうか。1965年に発見された北魏司馬金龍墓出土の柱礎に³²、伎楽童子とともに付された忍冬文があり（図2-63）、これが比較的複雑であるが、縦文図cでなく横文図cと同等レベルと私考される。

雲岡石窟については、今日の一部剥落した様子から見て、後代に粘土を貼りこれを彫塑・整形しているのではないかと思える部分が見える（図2-64）。また、6,9,10窟の拱門に限って複雑な輪つなぎ文を施していることなど（図2-65）³³、いくつか考え合わせると、後代において改修されたとする観点は、やはり必要ではないかと思われる。

つぎに、蓮華化生のユニークな研究で業績をあげた吉村怜氏の論考の中から読み取ることのできる点である（図2-66,2-67）。それは蓮華化生の生成の様子がほとんど同一の姿態で

²⁹ 前掲注3,文献独孤皇后伝(中華書局,p.1108),および前掲注17。

³⁰ 前掲注3,恭帝楊侑伝(同上p.99-103)。

³¹ 林良一「仏教美術の装飾文様」9,パルメット(2) (『仏教芸術』111,1977)。

³² 北魏司馬金龍墓出土柱礎(『文物』文物出版社,1972-3)。

³³ 八木春生「雲岡石窟における山岳文様について」上下(『ミュージアム』524,525,東京国立博物館1994)のうち,下p.4で,第二期石窟の拱門に限り彫り出されているという指摘がヒントになる。

あるにもかかわらず、龍門の場合は北魏時代とし、敦煌の場合は隋代としていることについてである³⁴。

敦煌は、いずれの時代でも都から遠く離れた西方はるか彼方にあり、ある程度時間的な遅れを考慮する必要があるが、蓮華化生のほとんど同一の文様が、龍門と敦煌において王朝も時代も隔てて存在するという不思議さに疑問を抱くわけである。おそらく敦煌か龍門か、そのどちらかの様式設定に問題があると考えたべきではないかと思う。

そこで、文様面から北魏と隋において、どのような差異を見出すかを考察してみよう。やや意外であった葡萄唐草文や、連珠文、メダイヨン、そして蓮弁束飾りについて検討する。

1. 葡萄唐草文

葡萄唐草文は、仏教受容以前、西方では遠くローマ時代から存在する。ガンダーラでは仏教装飾文様として3～4世紀にはすでに用いられていた(図2-68)。けれども中国での展開は意外に遅いようで、雲岡第8窟後室拱門東側に、魔醯首羅天が、胸前の右手に持つ葡萄の浮彫が早い時期のものであり、これが5世紀後半である(図2-69)。

龍門石窟の弥勒龕本尊光背(図2-70)や、古陽洞雲陽伯鄭長猷為亡父造弥勒像光背上辺(図2-71)などには6世紀代の葡萄唐草文があり、文様的に早い時期のものとされている³⁵。ほかにアメリカのメトロポリタン美術館にある、隋代の観音菩薩立像の持つ、水瓶に挿した葡萄がある(図2-72,2-73)。

そして敦煌初唐窟の209窟々頂や、同322窟の龕桁に葡萄文様が描かれているが(図2-74, 2-75)、その後、唐代で敦煌石窟全体に拡大した様子はない。

一方、道教の儀式に使用されたという長安城大明宮の三清殿で出土した磚(634年以降)や(図2-76)、やはり道教で修行用の必需品として用いた銅鏡の、鏡背の葡萄唐草文が、隋唐代で頻出している³⁶。(これは海獣葡萄鏡と呼ばれている。図2-77)したがって、葡萄唐草文は、仏教装飾としては、意外なことに隋から初唐の限られた時期に用いられていたということがわかる。

古陽洞では、窟頂部に文様のない未完成と思われる仏龕の光背、たとえば、北海王太妃高氏為孫元保造像(図2-78)などいくつかあるが、開窟当初、あるいはこのような状態を多く含んでいたかもしれない。ともかく、古陽洞内の葡萄唐草文の場合、文様の浮彫された時期を、この隋代前後のいわゆる流行期にあてはめて考えてみることも必要であろう。

2. 古陽洞仏龕装飾の連珠文とメダイヨン

³⁴ 吉村怜「龍門北魏窟における天人誕生の表現」1968, 「敦煌石窟における天人像の系譜」1993, いずれも同著『天人誕生図の研究』(東方書店,1999)所収。

³⁵ 水野清一,長広敏雄『龍門石窟の研究』1941,(同朋舎,1980覆刻)(一)P.62,および脚注6。

³⁶ 小窪和博『海獣葡萄鏡』(刀剣春秋出版社,1985)。

龍門古陽洞の仏龕には、連珠文やメダイオンがレリーフされた装飾文様がある。台座に二つの文様がともにある比丘慧成為始平公造像はその好例である（図2-79）。連珠文自体は2世紀クシャーン時代のコインで、すでに頻繁に使用されているので、中央アジアにおいて古く遡るものであるが、中国では、連珠文はフランスのギメ美術館にある河南省彰徳出土と伝える墓飾石闕および石造台座の浮彫が一つの画期を示している（図2-80）。

すなわち、連珠文を縁どりにあしらった民族服を着たソグド人達が多数描かれ、そして周囲のパルメット文様の周囲も、ほとんど連珠文で覆われている。まさに連珠文のオンパレードといっている。時代は北齊とされている³⁷。

敦煌では、つぎの隋代の壁画（277, 282, 380, 390窟など）に連珠文が頻出する³⁸。すなわち、連珠文が隋代になって大流行したことがここから伺える。

また円形の中に人面や動物や鳥や花などを描くメダイオンも、古代ローマ以来の西方文化の影響であるが³⁹、中国では1964年に発掘された陝西省三原県双盛村の李和墓の石棺蓋飾りに連珠文に囲まれた見事なメダイオンを見出すことができる（図2-81）。彼李和は『北周書』に伝記があり、墓誌によれば、隋の開皇2（582）年に死去し、その年に葬られていることがわかる⁴⁰。おそらくササン朝ペルシアの影響を受けた文様として、この石棺に刻まれたものであろう。

敦煌では、隋代とされる277,401,420窟などで多くメダイオン装飾を見ることができる（図2-82）。また同じく隋代とされるアメリカ・フーリア美術館にある見事な石製牀にも連珠文つきメダイオンが浮彫されている⁴¹（図2-83）。

したがって、このような連珠文とメダイオンを、ともに浮彫する古陽洞の仏龕装飾については、これらを北魏時代だけでなく、後の隋時代まで視野に入れて検討する必要があるということである。

3. 北齊～隋唐代に流行する柱の蓮弁束飾り

上記の連珠文についてのギメとフーリア美術館の2つの浮彫は、よく観察すると、柱の中ほどにいずれも蓮弁の束飾りが施されていることがわかる。蓮弁状の束飾りは、むろん古陽洞の仏龕でも、魏靈藏薛法紹等造像や、比丘法生為孝文帝并北海王母子造像などに見出すこ

³⁷ 東京国立博物館『シルクロード大美術展』カタログ（読売新聞社、1996）、図24。

³⁸ 敦煌文物研究所『敦煌莫高窟』2、（平凡社・文物出版社、1981）。

³⁹ 石渡美江「パルミラ彫刻の縦位メダイオン葡萄唐草文の東漸」（『古代オリエント博物館紀要』12、1991）。

⁴⁰ 陝西省文物管理委員会「陝西省三原県双盛村隋李和墓清理簡報」（『文物』文物出版社、1966-1）。

⁴¹ 『中国美術』3、（講談社1972）p.251, No.51。図には見えないが、右手門神の被り物とササン王コスロー2世（590-628）の王冠の類似性から、解説の長広敏雄氏は、隋代（581-617）中期を推定している。

とができる(図2-84)。また敦煌でも第57窟西壁龕内南側に、初唐時代の蓮弁束飾りがみえる(図2-85)。これは古陽洞の上記比丘法生造像と同じ六角あるいは八角柱に施された蓮弁束飾りと同一である。

じつはこの蓮弁束飾りは、龍門薬方洞の拱門門柱に大きく刻出されていて(図2-86)、そして大変興味深いことに、側面にある北齊武平6(575)年の碑文の、右方5分の1程度が削り落とされている。これは京大隊の報告で明らかにされている⁴²(図2-87)。報告では、他の石窟との比較から、力士や拱門装飾が、北齊様式であることを理由に、この時代に拱門の工事もなされたと推測しているが、果たしてそうであろうか。むしろこの門柱は、いわゆる切り合いをしているわけであるから、北齊時代より降ることを示しているというべきである。

北齊の都、鄴の西方に宝山の靈泉寺がある。ここを隋の開皇9年(589)に開窟した、当時大変著名な靈裕法師がおり、彼自身の灰身塔に、蓮弁束飾りを施した門柱がみえる(図2-88)。灰身塔は唐貞観6年(632)の年紀をもつことから、ここに付された蓮弁束飾りは、唐代に及んでいることを示している⁴³。

このほか、上記南響堂山の滏山石窟之碑を嵌め込んだ門柱に、やはり蓮弁束飾りが施されている(図2-89)。そして南響堂山の山内石窟のあちこちに蓮弁束飾りを見出すことができる⁴⁴。また河南省博物館所蔵の、隋代の陶屋の柱にも蓮弁束飾りが付けられている(図2-90)。したがって、蓮弁束飾りは北齊から隋唐代にかけて、大変流行した装飾であったということがいえるようである。

そして、上節で取り上げた古陽洞題字の、背景にあるレリーフをよく観察すると、中央の蓮華の茎には、実際のハスの茎に着いているとは思えない蓮弁の束飾りがあり、かつ茎は方形であることがわかる(図2-91)。このレリーフは門柱でなく方形の蓮の茎そのものという点に違いはあるが、蓮弁束飾りの流行する北齊以降の修造期、恐らく隋代を妥当とするということを示しているのであろう。

第5節 まとめと展望

以上述べた問題点をまとめてみよう。

1) まず、一般的に言えば古陽洞は太和19年(495)とされる長樂王丘穆陵夫人造弥勒像

⁴² 上掲注35『龍門石窟の研究』(一) p.77-80,(三) 図69-70。これを受けてか前掲注10『龍門石窟』図117や、李文生『龍門石窟裝飾彫刻』(上海人民美術出版社,1991)p.75図111,112.は、いずれも北齊としている。

⁴³ 常盤大定、関野貞『中国文化史蹟』巻5,解説上,(初版は『支那文化史蹟』で1939—1941.のち法蔵館が改題して1975覆刻)p.65-72。

⁴⁴ ①邯鄲市峰峰礦区文管所・北京大学考古実習隊「南響堂石窟新發現窟檐遺迹及龕像」②河北省古建築研究所・孟繁興「南響堂石窟清理記」③鐘曉青「響堂山石窟建築略析」,いずれも『文物』文物出版社,1992-5所収。

記が最も古く、東魏武定3年（545）の比丘曇静為大統寺造釈迦像龕が、最も時代の降るものとして知られているので、この期間内に文様の様式的区切りがあるとみることが穏当である⁴⁵。

けれども、敦煌など仏教関係で隋から初唐代の限られた期間で、葡萄唐草文が装飾的に用いられていることが理解できたので、古陽洞に見出される葡萄唐草文も、上記期間を超える年代に追刻された可能性が考えられる。

2) 隋代に追刻のある造像碑等を観察すると、西方の影響は北齊・北周から隋唐にかけて、より複雑な文様帯に発展していくことがわかる。したがって、古陽洞の仏龕装飾に、敦煌の隋代石窟で頻出する連珠文や、西方の影響によるメダイヨンが複合的に見られることは、古陽洞が開窟した北魏期以降に、何らかの追刻がなされていたことを示すものである。

3) 古陽洞の仏龕中の、蓮弁の束飾りをつけた門柱を調べてみると、蓮弁の束飾りは、北齊・北周から隋・唐にかけて流行している。が、龍門葉方洞の拱門門柱の場合は、側面の北齊碑を削って作られているので、この装飾が北齊以降のものであることを明らかにしている。また隋代に重修した石窟には、多くこの角型タイプの蓮弁束飾り門柱を見出すことができる。したがって、角柱の蓮弁束飾りは、隋代における古陽洞仏龕の重修を裏付ける要素の一つとして注目されていいであろう。

4) 本来の北魏遷都時点における古陽洞の文様は如何なるものであろうか。アメリカ・ネルソン美術館にある太和18年（494）の紀年銘のある釈迦三尊像（図2-92）を基準作例として念頭に置くことがいいと思う。これは文頭の林氏の横文図c 前後に相当するであろう。ただし、古陽洞における精緻な様式分類は今後の課題である。

さて、残された疑問の一、二をとりあげて本章の結びとしたい。その一つは、なぜ龍門石窟に隋の紀年銘文が少ないかということである。それは、隋代の重修が巨大で国家的となり、それ以前の造仏の規模や目的と違いが生じていたからではないかと考えたい。また、たとえ仏龕を改修する場合でも、前代の北魏の銘文を、改刻せずに大切に残すという、文字に対する強靱な伝統精神が、写経と同様に崇仏思想の中で生きづいてきたためともいえる。

二つには、はじめに触れた、初代文帝と二代煬帝の崇仏政策が、数値のうえで信頼できるか否かということである。これは上述の水泉石窟の補刻部分などの出土資料がさらに発見されれば、その信憑性も高まるに違いなく、今後の他の石窟の研究に期待したい。

⁴⁵ 李文生編「龍門石窟大事年表」（龍門文物保管所、北京大学考古系編『龍門石窟』2,平凡社・文物出版社1988 p.284-295所収）。